

A decorative border consisting of a thin black line forming a rectangle, with stylized leafy vines and leaves extending from the corners and along the top and bottom edges.

作文部門
入賞作品

小学生の部

《特選》

かがやく未来をつくりたい

稲枝北小学校 五年

福原 千紗 さん

わたしたち五年生は、今年、滋賀県で開かれた障害者スポーツ大会開会式に参加することができました。以前に開かれたのが四十年以上前と知り、参加できることをとてもうれしく思っていました。

当日会場に着くと、通路にある点字ブロックや、常に話し言葉を手話にして伝える大きなモニター、バリアフリーのトイレ、補助犬用のトイレまであることにおどろきました。この会場には、耳や目や、体の不自由な人がたくさんおられるのだということが会場の様

子から伝わってきました。体の不自由な方々が、どうやってスポーツをされるのだろう、入場行進って自分で歩いてこられるのかな、大丈夫かなと、なんだか心配になってきました。

数々の目を見張るようなすばらしいパフォーマンスの後に、いよいよ選手の入場行進がはじまりました。沖縄県から順番に選手が入場してこられました。車いすに乗った選手、手をひかれて入場する選手、元気にジャンプしながら歩いてこられる選手など、本当にいろいろな選手がおられました。共通していえることは、みんなすばらしい笑顔で入場されていたということですね。わたしの、大丈夫かなという心配は、選手の笑顔で吹き飛びました。そして、そんな選手たちの笑顔につられて、気がつけばわたし

は、夢中で応援スティックをにぎりしめ、大声で「がんばれ！」と応援していました。わたしだけでなく、周りの友達も、観客もみんな笑顔で声援をおくっていました。体が不自由な人も、そうでない人もみんなが一つになったような気がして、なんだかうれしくなってきました。

障害者スポーツ大会開会式に参加して、がんばる選手たちに会えて、全力で応援して、本当にすばらしい体験ができたと思います。何かに挑戦することには、制限はないのだと気付きました。やってみようという気持ちがあれば、それを助けるための工夫をみんなで考え、みんなが応援していいことで、できないことはないように思えてきました。体の不自由さに関係なく、みんながかがやける、そんな

な未来をつくっていくことが、わたしたちに与えられた使命なのかもしれないということを、この体験から学ぶことができました。

《選評》

障害者スポーツ大会開会式の経験から得た思いを素直に表現してくれました。会場での作者の心の動きが瑞々しく書かれていて、私もその場にいるように感じました。こうした「体験」や「知る」ことによって、偏見から解放されるのだと再認識しました。障害のあるなしに係わらず『やってみよう』という気持ちがあれば、助けるための工夫をみんなで考え、みんなが応援していく『ボーダーレスの本質』について、頼もしい限りです。

《特選》

「ここにいられることが

「きせき」

稲枝東小学校 五年

森田 眞那帆 さん

私は、最近「命の授業」を受けた。助産しさんにお話を聞いて、今、私がここで元気にいられることが「きせき」だということを学んだ。そして、約三十八億年前に地球がたん生して、約三十五億年前に、生命がたん生し、ヒトが約三十四億九千五百万年かけて、生まれた。そのことを私たちは三十八週間で行けることを知った。約三十四億九千五百万年が三十八週間は、助産しさんが言ったとおり、きせきだと思った。

また、私は私のご先祖さ

まが一人でもきずつけられていたら、私はいなかったということを知った。そして、クラスのみんなや他学年の子をきずつけるといことは、結果的には、その子やその子の子ども、まごなどをきずつけているのと同じことだということを知った。目にみえないたくさんの人達をきずつけてしまふと知って、急にこわくなつた。私は、「ムカツ」とくと、たまに手を出してしまふことがあつた。じょうだんできずつけても、その子の未来をけしてしまうのだとわかつた。

そして、「きずつける」ということが今までおこらないことが、本当に「きせき」だということが分かつた。助産しさんに最初に「あなたは今ここで元気にいられることがきせき」といわれて、はじめは、「へえそうな

んだ」と軽い気持ちで受けとつていた。だが、本当に「きせき」だということが最後に深く分かつた。その分かつた理由が、助産しさんがあるかく率を見せてくれた。地球にいん石がおちるかくりつが、一億分の一だそうだが、「わたしはわたしであるかく率」が一兆分の一だそうだが、いん石がおちるかく率より、わたしがわたしであるかく率の方が小さいということを知んだ。「わたしはわたしである」ということが最初、意味が分からなかつた。だが、「私がいなかつたのかもしれないかく率」が一兆分の九千九百九十九億だと思ふ。私が今ここにいられることが「きせき」だからだ。

これからは、助産しさんに教えてもらったこと「今、私がここで元気にいられることが、「きせき」という

ことを忘れずに、その「きせき」をいろいろな人に広めたい。私は、絶対に、だれもきずつけないようにしたい。みんなの未来をきずつけたくないから。

《選評》

「私が私である」確率は一兆分の一なんです。知らなかつたです。確かに奇跡的な数字だと思ひます。自分がそうであれば、クラスメイトもお隣のおじさんも、外国に住む顔も知らない人であっても、同じく大切に繋がれてきた命だということ。命の重さはみんな平等。授業を通じて大切な気づきがあつたことを素直に書かれているところがいいと思ひました。祖先に思ひを馳せ、将来につないでいく人になつてくたさい。

《入選》

警察官を目指して

稲枝東小学校 五年

島田 しまだ 心 しん さん

この間、女性警察官の多さは何パーセントなのか調べたことがあります。結果は、男性警察官の方がとても多く、びっくりしました。なぜ女性警察官は少ないのでしょうか。確かに、警察官といえば男性のイメージがあるのも確かです。

たまたまテレビで、女性警察官の方の、一日が特集されていました。その方は、交番で働いています。交番に来る通報は一日で百二十件だそうです。その話を聞いて、私は通報件数がとても多くて、大

変だろかなあと思いました。あるインタビュウで、なぜ警察官になろうと思ったのかを聞かれました。女性警察官の方は真つ先にこう言います。「昔、外で歩いていると近くですりが起こり、泥棒が前を走っていきました。その男性をある女性警察官が、すごい速さで追いかけていきました。それが、かっこいいなと思ったからです」。その話を聞いて、私は警察官という仕事に強く惹かれるようになりました。

その次の日に友達の子が、かわいい鉛筆を、五本学校に持ってきていました。私は、「女の子の鉛筆じゃん」と思い、その言葉をつい相手に伝えてしまいました。その瞬間、私は恥ずかしくなりました。この前まで、女性警察官は、かっこいい。好きなも

のに男女の性別なんて関係ないと思っていたのに、その反対の言葉を使ってしまったからです。私は、かわいい服を着たくありません。学校では、いつもズボンを履いています。ある日、男の子に、「女の子なのに男の服着てるじゃん。変なの」と言われた時は、とても悲しかったはずなのに、同じ思いを相手にさせていることに気づきました。私は、その時のことを強く後悔しています。

ある時、学校に行くと、掲示板に「男らしい？女らしい？君らしい！が一番！」と書かれているポスターを見つけました。そこには、女の子がズボンを履いて、かっこいい靴を履き、男の子がスカートを履いて、可愛い靴を履いている写真があります。女の子がズボンを履いてかっこい

い靴を履き、何よりニコニコ笑っているところを見ると、これまでのことを思い出し、「やっぱり自分は自分らしくがいいな」と思いました。将来、私は警察官になりたいです。男性とか女性とか、周りの目とか言葉などに左右されず、テレビで見た女性警察官のように、自分の気持ちに正直に、胸を張れる警察官になりたいです。

《入選》

理由

城東小学校 六年

かわむら えりな
川村 恵里奈 さん

違いがあることつてにげる理由になるのだろうか。私は小学三年生まで六年間ベトナムに住んでいた。ようち園は、インターナショナルのようち園に行っていたので、日本語じゃ通じないことがたくさんあった。ようち園に通っている間に覚えてた英語もある。でも覚えたのは英語だけじゃない。色々な国から来た友達や先生とコミュニケーションをとり仲良くなるために、ジエスチャーが役に立つことも覚えた。「言語が違うから、まず無理じゃん。」とあきらめる人もたくさんいる。

その一方で「言語が違っててもなんとかしてコミュニケーションをとろう。」と工夫する人も同じくらいいる。そういうことを私はベトナムで学んできた。

ようち園はインターナショナルで困ることがたくさんあったけど、小学校は日本人学校だったから学校生活に問題はなかった。でも日常生活では、どうすれば良いか分からないことが色々あった。私はベトナムに六年間いたが、簡単なあいさつと一から十まで数えることくらいしかベトナム語が分からない。自分は話せなくてもお父さんとお母さんが話せていたから買い物などには困らなかつた。でも、同じマンションに住んでいる人は、かん国人だったり中国人だったり、たくさんの方の国の人があった。あいさつはしていたけど、エレベーターで、マンションのそつじをし

てくれていたおばさんに、ベトナム語で話されて、何を言っているか全然分からなかつた。でも「ニコニコとした表情やジエスチャー、声のトーンで何を言いたいのかが伝わってきた。外に出かけたときも、外国人がたくさんいて、みんなフレンドリーに話しかけてくれた。心が温まったような気がした。だから、国籍が違うから、話せない、仲良くなれない、というのは人間の勝手な思い込みだと私は思う。旅行に行ったときにも、ホテルの人や地元の人が仲良くなるうとたくさん声をかけてくれた。私は一年生のとき、初めて行く学校、初めて会う人におびえてだれにも声をかけられなかつた。だれかが話してくれるのを待っていた。だけど、旅行から帰ってきた後、学校で私は、少しずつだけどクラスの人に声をかけて仲良くなるう

とがんばった。あのときの旅行は、私をかえてくれたと思う。

これまでに、色々な環境の中で生活してきた。だれだつてそつだろつ。環境が変わつても、いつしゅんで慣れる人もいるが、すぐには慣れない人もいる。私もすぐには慣れることができない。それでも少し勇氣を持つて一歩ずつ進んでいくことが大切だと思つ。こわいと思つたら一回待つて、そこから少しずつ挑戦していけば良いと思つ。

だから、違いがあつても挑戦からにげる理由にはならないと思つ。「自分はみんなと違つてできないから。」とあきらめてしまつたらいつまでたつても、夢のまま。違いがあつてもにげないで、いつでも挑戦し続けたいと思つ。

《入選》

私が大切にしていきたい

思いやりの心

亀山小学校 六年

おむかた
まこ
大方 眞心 さん

二〇二五年十月、小学校生活最後の運動会まであと半月というところで、私は左手首を骨折してしまいました。運動会に向けて走る練習をしている時に、転んで左手を地面に強く打ち付けてしまったのです。今までに経験したことのない痛みでした。しかし、病院でお医者さんに診てもらって骨が折れたと分かった時

「小学校生活最後の運動会なのに、出ることをやえできないかもしれない。」

と思うと、もっと心が痛くなり
ました。

骨折してからは、毎日の生活の中で不便に感じるものがたくさんありました。左手が痛むので、最初はランリユックを背負って登下校することができませんでした。また、利き手は右手なので鉛筆は持てますが、左手で紙を押さえることができないので、上手に文字を書くことができませんでした。お茶わんを持って食べることもできず、上手に食べることもできません。また、ペットボトルのふたは開けられないし、お風呂では上手に洗えませんでした。いつもは何ともないことでも、「左手が使えないって、本当に不便だな。」

と感じました。でも、そんな時

学校では同じクラスの友達や先生が助けてくれました。「かばん、持ってあげようか?」「何か手伝えることがあったら言ってみてね。」

友達からのこんな声かけは、本当にうれしかったです。また、家でも家族の力を貸してもらいながら、なんとか生活することができました。

骨折して、私はふだんの「当たり前」って、とてもありがたいことだなと実感しました。そして、もう一つ、

「私は一人ではなく、いろんな人たちに支えてもらって生きているんだ。」

と改めて感じました。骨折して不安な気持ちの時、同じクラスの友達や先生、家族がそばでサポートしてくれたおかげで、手の痛みもしんどいことも乗り切れました。治りきっていないかもしれませんが、心配していた運動

会もみんなに支えてもらって全ての競技に出場することができました。小学校生活最後の運動会は、心に残る最高の運動会になりました。

今回、私は、友達や先生に助けもらったおかげで、つらいことも頑張って乗り越えられました。なので、もし、困っている人がいたら、今度は、私が自分から声をかけてその人の力になりたいです。そうすることで、少しでも、世の中が過剰しやすい環境になると良いなと思っています。

《入選》

高れい者の方にやなしくへ

城東小学校 四年

岩崎 玲那 さん

わたしは、ときめきの学習で、「城東の町をみんながハッピーなやさしい町にする」というめあてを作ったとき、体の不自由な人や高れい者などの人たちは、どんなことでまってるのか、気がなりました。そこで、城東の町がハッピーになるために調べることにしました。

学習を通してわかってきたことは、高れい者の方は、人知しようにという病気になる人が多いことや、お年よりになると目が見えにくくなったり、手や足が重くなったり耳が聞こえにくくなったりすることです。

す。高れい者の方は、体にたくさんさんのしょうじょうが出てきて大変だとわかりました。

わたしは、前に高れい者の方についていろいろなことを感じた体験があります。私が住んでいるマンションのとなりの部屋には、おばあちゃんが住んでいました。たまに会うので、あいさつをしたり少し会話をしたりしていました。そのおばあちゃんは、体が動かしにくく、少し体の不自由な人に近い感じがして、大変そうでした。ある日、私がようち園で作ったおくらを、そのおばあちゃんのお部屋のとびらに置いておきました。次に会ったときに、おばあちゃんは、家の中に入れてくれました。家の中は、自分がわかりやすいように整理されていて、一人でしたのならすごいなと思いました。今でも会うとあいさつをしています。この経

験から、高れい者の人は、体がいろいろ不自由でまってる人もいるのだとわかりました。でも、高れい者の人は、やさしくて、できることも多いことにも気づきました。みんなが高れい者の人や体の不自由な人のことをよく知って、いけば、どんどんやさしさが広がって、城東はどんどんやさしい町になっていくと思います。

ときめきの学習をして、高れい者の人は、いろいろと体の不自由な人も多いと分かったので、周りの人たちにも、高れい者の人がどんなことでまってるのか、どうされるとうれしいのかを知って、高れい者や体の不自由な人にやさしくしてほしいと思いました。もし高れい者や体の不自由な人に出会ったら、やさしく声をかけて、「まってる」とはいいか

などを聞き、もしできることがあれば助けたりできると城東の町がハッピーな町になると思います。

今、私たちは、城東の町が高れい者の人たちにやさしい町になるようにポスターを作っています。そのポスターを見た人は、少しでもお年よりのことを知って、自分から積極的に行動してほしいと思います。人知しようにお年よりの人が多ければいいけど、

「大じょうぶですか。」
などとやさしい言葉をかけてあげると、お年よりの人も助けを求めたり、何をしてたかを思い出してくれたりするので、ぜひ行動してみてください。
みなさん、高れい者の人にやさしく接していますか？

中学生の部

《特選》

私の願い

中央中学校 三年

青木 あけみ さん

外国人差別について、最近ニユースで聞くことが増えてきた。日本に住む外国人の数は、二〇二五年で約四百万人となり、過去最多となった。これからも増えることが予想されている。

私自身も、外国人の一人だ。私のお母さんとお父さんはブラジル人で、私が五歳のときに仕事で日本にやってきた。もちろん日本語は全くわからなかった。私は、小学校一年生の春に日本の学校に入った。もちろん私も日本語がわからなかった。その時の担任の先生のこと怖くて、頼る

ことも難しかった。他の日本人の子どもが泣いていても、何で泣いているのか、言葉がわからないから、先生に怒られるのが怖くてずっと黙っているしかなかった。私には、今でもそのことがいやな思いとして残っている。

そのようなスタートから、私は少しずつ日本語を学んでいった。それは簡単なことではなかった。友達とたくさん話せるようになりたかった。今では、友達と普通に日本語で話せるようになった。勉強は難しいけれど、高校進学に向けてがんばっている。

たぶん、日本には私みたいに大変な思いをしている外国人の子どもがたくさんいると思う。もしかしたら、私よりもつらい思いをしている人がいるかもしれない。私が知ってほしいことは、多くの外国人が一生懸命日本のくらしになじもうとしているこ

と。「同じ」でありたいという思いがあること。けれど、日本語が十分でなかったり、文化の壁にあたったりすること、しんどくなることもある。そのような中で、私たちは一生懸命生きています。

日本は、これからどんどん多文化な背景を持つ人が増えていくと思う。差別も増えてしまうかもしれない。私の友達は、国籍が違うからといって私を仲間外れにはしない。大切なのは、国籍で人を判断せずに、その人の文化を理解して、どうすれば共生できるか、手をとり合って考えていくことだと思う。私は日本が好きだ。みんなにも、外国のことを好きになってくれたら、うれしいと思う。

《選評》

滋賀県内で暮らしている外国人は二〇二四年末現在四万一千四百七十五人。県人口の三十四人に一人が外国人です。そんななか当事者の視点で、外国ルーツの人の置かれている現状や愁いをうまく作品にされたと評価しました。お互いの大切にしていくことや、文化をよく知り、理解して共生していくことが求められます。社会の歪の矛先はマイノリティーに向きがちですが、「みんなちがってみんないい」そういう社会を創っていきましよう。

《特選》

差別の種はどこから

中央中学校 二年

南部 なんぶ 花寧 はなね さん

今もこの社会では差別は存在する。差別は遠い世界のことでではなく、無関係な人は一人もいないはずだ。差別はいけないと誰もが分かっているのに、どこから差別の種が生まれるのだろうか。

私は道徳の授業で、このよいうなことを学んだ。それは、差別とは、相手を知らない故に生まれてしまう思い込みや不安、相手より自分が勝っていたという気持ちなどから、生まれるそうだ。

例えば、みなさんもこんな場面に出会ったことはないだろうか。私は以前、「真面目

な性格だから」という理由で、血液型はA型だと友達に言われたことがある。しかし本当は私はO型である。確かにそれぞれの血液型によって性格のイメージがあるが、必ずしも全員の人に当てはまるわけではないのだ。小さな小さなイメージが差別につながるのか、と思うかもしれない。しかし私の友達は、血液型がB型だからといって「なんかさわがしそうだな子だよね。」と言われて、傷ついていたことがある。他にも、音楽のリコーダーのテストのときに、これは差別ではないかと思った場面がある。発表をきいているときのみんなの反応が、発表者によって違うのである。勉強が苦手な子に対しては、少し失敗しても、「大丈夫だよ、頑張れ。」、成功したのなら、「すごくよかったよ。」と温かく見守っていた。しかし成績の良い子に対しては、

成功したのなら、「さすが優秀だね。」と言うが、少し失敗したら、「大したことないじゃん。」と言う。逆に勉強が苦手な子には、「意外と上手だったよね。」とも言っている場面もある。勉強が得意な子もいれば音楽が得意な子もいて、得手不得手は人それぞれである。テストで頑張ったのなら同じように認められるべきなのに、なぜ人によって鑑賞態度が違うのだろうか。得意なことがあるのは確かにすごいことだが、勉強がよくできる子だけが特別な訳でもないのに、なぜ人によって求められるハードルが変わるのだろうか。さらに、体育の授業でもこんなことがあった。自分の身長や体型、普段の成績などで、種目を上手にできるかどうか決めつけられたのだ。自分の身長や体型などをからかわれたり、みんなの期待と違えば陰でネタにされたりす

るのは、決して良い気持ちではなかった。

このように日常をふりかえれば、ほんの少しの思い込みが相手を傷つけてしまうことがあると分かる。相手を知らないからこそ、自分が勝っていたと思うからこそ、ときに自分に都合の良い理想を相手に押しつけてしまうことがあるのではないか。それがときにその人らしさを無視し、差別につながってしまうのではないか。差別をなくすには、相手を表面的な人柄や肩書きだけで判断せず、その奥にある気持ちを尊重しようとする心構えが大切だと思う。そして、自分にも相手にもそれぞれ良さがあることを認めていくことのできる関係を築きたいと思う。

《選評》

中学校での人権学習を通して、自らが考えたことをまとめた作品です。血液型のイメージ、音楽のリコーダーテストの発表を聴いた態度、体育の授業での決めつけなど、身の回りで感じた差別意識や人権課題。私達の日常に潜む「差別の種」を作者は冷静に見つけていきます。「ほんの少しの思い込みが相手を傷つける」場面がたくさんあるのです。そして、「自分にも相手にもそれぞれ良さがあることを認める関係を築く」という解を作者は見つけたようです。

《入選》

授業を通して考える

部落差別問題

中央中学校 三年

東條 結衣 さん

私たちの学校では、動画をみたり講演を聞いたりして、部落差別について学ぶ時間があった。その中で、私が一番深く考えたのが「寝た子を起こすな論」についてだ。

「寝た子を起こすな論」とは、部落差別を子どもたちに伝えなければ、自然とその差別は忘れられてなくなるだろうという考えだ。私が部落差別を初めて知ったのは、中学二年生の道徳の授業のことだ、そのときは「寝た子を起こすな論」と同じ考えを持っていた。私はそれまで、住んでいる地域の場所だけ

で差別するなんて聞いたことがなく、あまり身近に感じられなかった。だから、「きつと私たちにはあまり関係のないことだろう。」と思っていた。そのときに、隣の席の友達が、「こつやって授業をするから差別をするんじゃないの。授業がなければ部落差別を知らないまま過ごせたのにな。」と言っていた。私は、その友達の話にとても共感したし、学校の授業を良いものだとは思わなくなっていた。

三年生になり、再び部落差別についての授業が行われた。授業では、一本の動画をみた。その内容は、もうすぐ結婚する女性の母親が被差別部落の出身であることが理由で、結婚に影響が出てしまうかもしれないというものだった。その女性は、部落差別についてあまり知識を持っておらず、無意識に友達に差別的な発言をしてしまう。その場面を

見たとき、私は正しい知識を持たないことの恐ろしさに気づいた。私が、今まで考えていた「寝た子を起こすな論」では、自分は何も知らないまま過ごせて良いかもしれない。けれども、何も知らなければ、その動画の女性のように、差別したことに気づけないのだ。

私は、人権講演会で「マイクログレッション」という言葉を知った。「マイクログレッション」とは、差別している意識を持たずに人を傷つけることを言う。差別する人は、この、マイクログレッションである人が多いようだ。それは、差別について無知であることが深く関係している。

このようなことから、私は、部落差別についての授業を受け、一人ひとりが差別について正しい情報を持つことが大切だと考える。「寝た子を起こすな論」も、今はインタ

ーネットによる情報で、通用するものではないと思う。これからも、部落差別だけでなく、いろいろな差別について学んでいきたい。そして、私の世代から次の世代へと、正しい情報を伝えていきたい。

《入選》

心から始まる差別

彦根中学校 三年

佐野 大知 さん

「差別」とは何だろうか。差別をしてはいけないというけれど、それがどんなものなのか、わからなければ、なくすことができるとは思えない。だからこそ、まずは「差別」がどのようなものなのかを考えていく必要があると思う。

一般的な知識では、差別とは人種、性別、障害、考え方など、「ちがいを受け入れないことだと知られていると思うが、自分は違うと思うている。

中学校三年間、自分は陸上部に所属していた。とある記録会の日、自分は競技も終わ

り、自分のチームのテントでゆつくりとしていた。百メートル走のスタートリストが、電光掲示板に映された。そこには、名前は漢字、名前はカタカナの、おそらく日本人と外国人のハーフであろう人の名前があった。自分は、「名前カタカナやん。面白い。」と思ってしまった。隣に座っていた友達も、同じことを思ったのか、周りをキョロキョロしてそわそわしている様子だった。

この時点で、「差別」は起こっているのではないか。自分は相手をばかにして笑ったわけではないが、自分と相手との違いを見て、こういった感情を抱いてしまったのは事実だ。つまり、相手を批判して暴力、暴言をしまうことをするのが差別の始まりではなく、もっと前の段階、相手との違いを、面白く感じてしまうことから始まってしま

うのだ。このような小さなちよつとした感情が、しだいに行動に変わり、それが大きくなって、世界的な差別に変わっていくのだ。

今、世界中に残っているいろいろな差別も、こうした小さな感情から始まっていくのだと思う。例えば、現代も残っているLGBTQの差別も、自分やクラスメイトなど、周りの人と違う人に対して、誰かが面白いと思うってしまったことから、からかいが起こってしまう、だんだんエスカレートして、こうして日本、世界での問題となっているのだ。だから、違いを見つけても、それを面白いと思ってしまうことにも問題があるのだ。

このようなことを減らすには、一人一人の努力が欠かせない。一人一人の努力によって、社会全体を変えることができると思う。差別ない未

来が実現することを、願っている。

《入選》

気付かぬうちの差別

彦根中学校 三年

種村 智菜 さん
たねむら ちな

私がこの人権学習を通して学んだことは、差別や偏見は不安や恐怖などの人々の負の感情からおこるということです。例えば、コロナの時は自分がかかったらどうしようという不安から他府県の人々への差別が広まりました。私も心のどこかではそんな気持ちがあったかもしれないと思います。そしてその他にも人々を差別するような心を持っていたことに気づきました。

私が家族と友達と旅行に出かけていた時のことです。

遠くへの旅行だったので新幹線や電車で移動していたら、私たちが乗っている車両にある外国人団体が乗ってきたのです。その人達も旅行中なのかとても大きなキャリーを持って車内を歩き出しました。初めは、乗る車両をまちがえたのかなと思っていたのですが、何度も往復していて自分の座席が分からないようでした。その車両には、たくさん人が乗っていたのですが、誰も声をかけずその外国人もどうすればいいのか分からず、とても困っている様子でした。私もその場にいました。もし私の英語が伝わらなかつたらどうしよう、そもそも困っていないかもしれないと思いきや、外国人団体に声をかけた人がいたので、そしてその外国人団体を席まで案内したので、その人は女性でし

たが私から見ると、とてもキラキラしていてかっこよく見えませんでした。そしてそれと同時に、外国人だし伝わらないかもしれないし、という不安からその外国人の気持ちを考えずに、外国人だからという理由で少しでも差別をするような心を持ってしまった自分が恥ずかしくなりました。そして差別は不安や恐怖などの小さな感情から広がることで大きくなっていくのだなと感じました。知らず知らずのうちにしてしまっていることがあるのが差別の怖さだと思いました。そしてそんな中、その怖さにおびえないあの女の人はすごくかっこいいと思いました。

今思い返すと、細かい所かもしれないけれど差別をしていたのだと気づきました。細かい所や小さい所でも、自分がされたら嫌なのでないようになりたいと思いました。

そして電車で声をかけたあの人のようなかっこいい人になりたいです。

《入選》

普通とは

彦根中学校 三年

川口 葵咲 さん

突然ですが質問です。みなさんにとっての「普通」とは何でしょうか。きつと、「あたりまえ」「大多数」「みんながそうしていること」など、たくさんのお答えがでてくると思います。けれど、それらの言葉を聞いたとき私は少し疑問をもち、考えてしまいます。本当に普通は一つなのか、と。私はこれまで生きてきた中で、「普通はこうするでしょ」「それは変だよ」と、言われた経験があります。例えば、意見が周りどちがったとき、好きな物が流行とずれていくとき。そう言われるたびに、私が自分でえらんだものが間違っていると言われている

ように感じ、悲しくなりました。しかしある日、私は少し不思議に思いました。この「普通」を決めているのは一体だれなのか、と。家族、地域、学校、国。それぞれの環境が少しでもちがえば、価値観も生活の仕方も全く異なります。日本では、家の上がる前にくつを脱ぐというのがあたりまえですが、その習慣が存在しない国もたくさんあります。食べ物、あいさつの仕方、考え方、見た目。世界には異なる文化や考え方の「普通」があり、それが正しいというわけではありません。そう考えた瞬間、私は気づきました。今まで私を悩ませていた「普通」という言葉は、とてもあいまいで、だれかが勝手に決めつけていいものではないということに。

私たちは時々、自分の価値観だけで他人を判断し、「変」「おかしい」と決めつけてしま

います。でも本当は、そのちがいがこそが人らしさであり、その人自身の魅力で、世界を豊かにするものだと思います。最近では「多様性」という言葉をよく耳にしますが、それは特別なものではなく、本来人間がもっている自然なちがいのことだと思います。だからこそ私は、人のちがいを否定せず、相手を思いやり、認め合える人になりたいと思います。だれもが自分らしく過ごせる社会になると信じ願っています。もう一度、問いかけます。あなたにとっての「普通」とは何ですか。

一般の部

《特選》

「ことばのない弟から」

教わったこと

近江高等学校 一年

中尾 なかお 梨里 りり さん

私には、中学一年生になる弟がいます。弟は発達障がいがあり、言葉を一切話すことができません。知的な発達は、三歳から五歳レベルで、さらに強い食物アレルギーもあります。弟は小さい頃から特別支援学級に通い、現在、養護学校に通っています。

中学生の頃、私は弟のことを友達に説明するのが苦手でした。どう言えば相手に分かってもらえるか、そして弟の事を変に思われないか、怖かったのです。ある日、中学校の友達に「なんで弟くんは

しゃべらないの？」と聞かれたとき、私は言葉に詰まり、「まだ小さいから」とごまかしてしまいました。家に帰ってから、その答えは弟に対して悪かったのではないかと、自分を責めました。

しかし、弟と過ごす時間の中で、私は少しずつ「話せない」という事と同じではないかと思いました。弟は、表情やしぐさ、手の動きで驚くほど多くのことを伝えてくれます。私が学校から帰ると、満面の笑みで駆け寄ってくる姿。好きなテレビを見るときの輝く目。アレルギーで食べられないものが出たときの、少し寂しそうな視線。それらは、言葉以上にまっすぐで、力強いメッセージです。

そんな弟と暮らす中で、私は「違い」に目を向けるだけでなく、「その人らしさ」に目を向ける大切さを学びまし

た。弟は言葉を話せないけれど、音楽が大好きです。お気に入りの曲が流れると、「ニコニコ」して楽しそうにしています。その笑顔を見ていると、「障がい」という言葉だけでその人を判断することが、どれほどもつたないことかと痛感します。世の中には障がいのある人に対して無意識のうちに距離を置いたり「かわいそう」と一方的に決めつけたりする人がいます。でも、それはその人の一部しか見ていないからだと思えます。弟の笑顔も、努力も、優しさも、その人らしさの一部です。私が弟を通して学んだのは、「違い」を理由に壁を作るのではなく、「違い」を知ること

で世界を広げられるということ。もちろん、私たち家族の日常は簡単ではありません。言葉が通じないゆえの葛藤やすれ違い、アレルギー対応の

為の食事作りや外出先での誤解や視線。時には何か恥ずかしく後ろめたい気持ちで心が折れそうになることもあります。それでも弟は毎日を一生懸命に生きています。その姿は、私にとって大きな励みです。

差別のない、明るく住みやすい町とは互いの違いを理解し、尊重し合える場所だと思います。弟のように言葉を持たない人も自分の思いや願いを持っていきます。その声なき声に耳を傾けられる社会こそ、人権が守られる社会だと信じています。弟が教えてくれた「ことばを超えてつながる力」を胸に、私は差別のない未来が来ることを願っています。

《選評》

発達障害の特性を持ち、養護学校に通う弟の存在を通して、家族の視点で書かれています。「友達にどう思われるか怖い」という思いを感じながらも、弟への愛情がよく伝わります。言葉が話すことができず、表情やしぐさ、手の動きで多くのことを伝えてくれる弟。作者は、「違いに目を向けるだけでなく、その人らしさに目を向ける」「違いを理由に壁を作るのではなく、違いを知ることによって世界を広げられる」と訴え、「声なき声に耳を傾けられる社会」を思い描いています。

《特選》

私の願い

彦根総合高等学校 一年

山本 彩心 さん

「ご飯いらない。」姉が突然そう言い出した。私は「どうせ仮病だろう。」と気にも留めなかった。けれど、その日から姉は本当にご飯を食べなくなつた。私が小学校五年生の時、それまで元気だった姉が摂食障害になつた。原因は異性からのいじめだった。はじめなんて映画やドラマでしか見たことがなく、「摂食障害」という病気も聞いたことがなかった私には、姉の変化は理解し難かつた。けれど、家族が「少しでも食べよう。」と説得するたびに、姉は「みんなで私を太らせよう」としている。」と叫び、暴れ回つた。

「太る」ということ以外、何も考えられなくなつてしまった姉を見て初めて「もう前のお姉ちゃんじゃなくなつてしまつたんだ。」と理解できた。私は、夜遅くまで、母と姉の怒号が飛び交う中で、「このままお姉ちゃんが元に戻らなかつたらどうしよう。」と思うと怖くてたまらなかつた。そして同時に、姉をここまで追詰めたいじめの加害者たちに、強い怒りが湧いた。なぜ姉が一方的に傷つけられなければならなかつたのか。なぜ加害者たちよりも姉の方がこんなにも苦しまなければならなかつたのか。何度考えても、答えは見つからなかつた。しかし、姉は数年の治療のおかげで、食べる量に波はあるものの、毎日ご飯を食べられるようになり、高校に通えるまでに回復した。

私は、あの数年間の姉の苦しみを今でも忘れることが

できない。そして、姉を追詰めたいじめを絶対に許すことができない。誰かを一方的に傷つけ、人生さえも狂わせてしまうような行為が学校の中で起こっていたことに、強い怒りを感じた。誰もが安心して過ごせる学校、誰かひとりで苦しまなくてもいい社会になることを、私は願っています。苦しんでいる人がいたら、どうか見て見ぬふりをしないでほしい。小さな気付きが大きな救いになります。私たち一人ひとりの思いやりと行動が誰かを救うことに繋がるかもしれないのだから。

《選評》

姉が摂食障害になつた経験を、家族の立場から振り返っています。その原因はいじめから始まり、加害者への強い怒りを感じています。からかいの言葉が「太る」恐怖につながり、摂食障害へと追い込まれ、そこから回復。家族にとっても大変苦しい日々であったことは想像に難くありません。「誰かを一方的に傷つけ、人生さえも狂わせてしまうような行為」を憎み、「誰もが安心して過ごせる学校、一人で苦しまなくていい社会」を願う作者の思いが、ひしひしと伝わってきます。「見て見ぬふりをしないで」「小さな気付きが大きな救いになる」という訴えは、あらゆる人権課題への回答だと思えます。

《入選》

違いを力に変える

彦根総合高等学校 一年

岡山 杏奈 さん

私は、競泳の滋賀県選手として今年の滋賀国スポに出場します。二歳の頃から姉の影響で始めた水泳ですが、先生方や仲間や家族のサポートにも恵まれ、苦しい練習ながらもたくさんの経験をし、競泳を続けてきました。昨年の佐賀国スポにも出場しましたが、何年も前から滋賀の国スポに向け、コーチと練習や試合を重ね準備してきました。開催まで十日を切った今、緊張感とともに気を引き締め練習に励んでいます。

昨年、佐賀国スポが終わるとすぐに障スポが始まりました。すでに滋賀県に帰って

たので、私は動画配信で、障害を持ちながらも素晴らしい成績を残し活躍されている選手の姿を見ました。これまでパラリンピックをテレビで見ただけでしたが、水泳競技が実際どのような競技をしているのかはあまり知る機会がなく、佐賀国スポでの選手の方々の活躍する姿を見て、とても感動し心に残りました。

私はこれまで大きな怪我、故障、病気もなく競技を続けてきました。しかし、思い通りの結果が出ない時もあり、レースの振り返りをする時には、自分の体の大きさや、その日のコンディションなど、自分の体の状態のせいにすることもなくはありません。もちろん、体調に左右されることもあります。私は五体満足で健康です。

視覚障害の選手はタッピンという棒で合図されターン

をする、足の不自由な選手は手を最大限に生かす泳ぎをする、手の不自由な選手は足を使つて泳ぐ、障害の特性によつてクラスも分かれて競技をされています。改めて見ると、健常者の私より水の掴み方が良かったり、体幹もしっかりしていたりと勉強させられることがたくさんあります。障害を持つていることで、健常者の選手とは違う大変さもきつとあると思いますが、共通するのは、どんな人も競技後、気持ちや感情があることです。もちろん私も同じですが、納得いかなければ気持ちもすつきりしない時もあるでしょう。しかし、達成感に満ち溢れた選手の表情がとても印象的で、自分自身の気持ちの持ち方を変えていこうという気持ちを引きもらいました。

障害に関わらず、同じ目標や方向を向いてスポーツをす

ること、互いに気づきがあったり、学んだりする機会があることは素敵なことだと思います。今の自分の力は納得いかない結果であっても、悔しい気持ちだけで過ごすのではなく、どのように自分の体を動かすのかを見つめ直す、ということに改めて気が付かせてもらえたと思います。また、当たり前に競技をし、健康に過ごしていることも日頃の指導やサポート、仲間がいなければできないことでもあります。こういった感謝の気持ちで自分の力になることも大切にして競技をしたいと思えます。今後、生活の中で、たくさんの気づきを受け止め、視野を広げること、自分の力に変えていきたいと思えます。

《入選》

人権理解

近江高等学校 一年

小島 鳳石 さん
こしま おうすけ

僕は「人権」という言葉を聞くと、最初は正直とても難しいことのように思っていました。教科書やニュースでは人権問題という言葉がよく出てきますが、世界の大きな事件や歴史の話と結びつけられることが多く、自分の日常生活とはあまり関係がないのではないかと考えていました。けれど、高校に入ってからいろいろな人と出会い、学校生活を送る中で、実は人権はとても身近なものだと感じるようになりました。

した。クラスの中では、勉強が得意な人もいれば苦手な人もいます。自分と考え方が合う人もいれば、正反対の意見を持つ人もいます。私はこれまで「違い」はただの特徵だと思っていましたが、人によつてはそれが理由で傷ついたり、差別の対象になったりすることがあると知りました。その時に誰にでも同じように認められるべき権利が「人権」なのだとして理解しました。

生懸命走っている姿を見て、なんだか声をかけてみたくなりました。「ナイス！」と簡単な言葉で伝えると、その子はとても嬉しそうに笑ってくれました。その笑顔を見て、言葉がうまく通じなくても、相手を認める気持ちは伝わることだと実感しました。同時に、僕はこれまでその子に声をかけなかったことで、知らないうちに相手を孤立させていたのかもしれないと反省しました。

これからの社会はますます多様になっていくと言われるます。国籍や文化、性別や価値観などが違う人たちと一緒に生きていくためには、お互いを尊重する姿勢が欠かせません。人権を守るといって少し大げさに聞こえますが、要するに「自分がされて嫌なことは人にしない」「自分がされてうれしいことを人にもする」ということだと思います。

高校生になった今、僕はまだ社会のことをよく知らないし、できることも限られていると思います。それでも、身近な人を大切にすることはすぐにでもできるはずだと思います。人権を守ることは遠い世界の話ではなく、僕自身の毎日の行動にかかっているのだと忘れずにいたいのです。

僕自身の経験で思い出すのは、中学生のときのことです。クラスに外国から来たばかりの生徒がいました。日本語があまり上手に話せなくて、周りの会話に入りにくそうにしていました。最初のうちは僕もどう接していいのかわからず、特に話しかけることもなく過ごしていました。でもある時、体育の授業で同じチームになり、その子が一

《入選》

誰もが安心して暮らせる

まちのために

近江高等学校 一年

根倉 珀翔 さん

私たちは毎日の生活の中で、無意識のうちに誰かを傷つけてしまっていることがあります。それは悪意があるわけではなく、ただ知らなかったり、思いやる気持ちが少し足りなかったりするだけかもしれない。でも、だからこそ、一人が「人権」を意識することが大切だと思います。

私は中学校のとき、車いすに乗った方が、駅の階段の前で困っているのを見かけました。誰も声をかけず、ただ通り過ぎていく人たちの中で、私も「声をかけた方がいいのかな」でも、迷惑かもしれない

いと迷ってしまい、結局そのまま通り過ぎてしまいました。その日一日ずっと、心の中にモヤモヤが残りました。あとで考えてみると、困っている人に手を差し伸べることは、特別なことではなく、当たり前のことなのだと気づきました。人は誰でも、年齢や性別、障がいの有無、国籍、性格など、違いを持っています。だからこそお互いを認め合い、思いやることが必要なのだと思います。

ニユースやSNSでは、いま差別やいじめ偏見のある発言を見かけることがあります。そうした言葉や行動は、人の心を深く傷つけ社会に分断を生みます。私たちはそのような現実を目を背けるのではなく、「それはおかしい」と声を上げられる勇氣を持つことが大切だと思う。差別のない明るく住みよいまちをつくるためには、まず

身近なところから始めることが大事です。困っている人に声をかける、相手の立場に立つて考える、誰に対しても丁寧な言葉を使う。そういった小さな積み重ねが、やがて大きな変化につながっていくのだと思います。

誰もが安心して暮らせるまちは、一人ひとりの行動によつてつくられます。私も中学校の時の後悔を忘れず、次に同じような場面に出会ったときは、迷わず手を差し伸べられる人でありたいです。そして、違いを認め合い支えられる社会を目指していきたいと思えます。人権とは、特別な人だけが守られるものではなく、私たち一人ひとりが「大切にされる存在」であるという証だと思えます。だからこそ、誰かの痛みに気づき、寄り添い、優しさをもって接することを、日々の生活の中で忘れずにいたいのです。

小さな思いやりの積み重ねが、きっと未来を変えていくと信じています。

《入選》

本当の私

近江高等学校 一年

富岡 とみわが 摩耶 まや さん

私はバイセクシユアルである。つまり、好きになる人が男性、女性に関わらず好きになることがある。そのことに気づいた中学生の頃から、ずっと心でかかえてきた。

中学一年生の時に、友達と同性愛に関するニュースについて話していた。友達が「恋愛って異性とするものだよ」と何気なく言った言葉になんとなく引つかかった。自分はその時から、異性だけでなく同性にも惹かれることがあった。それを「普通ではない」と言われたような気がしたからだ。その違和感をきっかけに調べてみると「バイセクシ

ユアル」という言葉に出会った。さらに深く調べると、それまで感じていた違和感がすっと溶けていくような気がした。

けれども、友達の前ではその気づきを口に出すことができなかった。中学生の頃の私にとって、友達からどう見られているかは何よりも大きな問題だった。毎日のように一緒にいる友達に「気持ち悪い」と思われ、私から離れていってしまうのではないかと怖くなった。仲間外れにされるくらいなら、黙って「普通のふり」をしているほうがいいと、自分に言い聞かせていた。

クラスで誰かが「同性愛って気持ち悪い」と笑いながら言っていた。そのとき私の心は鋭い刃物で刺されたように感じた。もし今の私の気持ちを打ち明けたら、この笑いの対象が自分になるのでは

ないかと、そんな恐怖で頭がいっぱいだった。友達には本当の私を知ってほしいのに、友達の反応を恐れている私がいいた。

だから、私はまだ自分がバイセクシユアルであると誰にも言っていない。けれども、この作文で多くの人に、自分の体験を言葉にすることで、「バイセクシユアル」という言葉や思いを知ってもらいたいと考えたのだ。打ち明ける勇氣はまだなくても、「こんな人もいる」のたと知ってもらえることで、理解や共感の一步になると信じている。

それでも社会には、いまだに偏見や誤解が強く残っている。SNSでは「半端者」や「節操がない」などという言葉をよく見かけ、テレビなども触れづらいものとして扱われる。私は「自分はやっぱり普通じゃない」と不安になる。特に友達の前での振る舞い

を考えると、その不安はさらに強くなる。

だからこそ、私は人権の大切さを強く感じている。人権は、誰にでも平等に与えられるものであり、一人一人が自分らしく生きる基盤である。私にとっては「好きの対象」を否定されずに生きることである。

私の人権について考えるとき、「本当の自分を隠さずに生きる未来」がある。それは、私だけにとつてではなく、誰にとつても生きやすい未来になると考える。私もこれからは自分らしさを大切に生きていこうと思う。

《作文部門総評》

作文部門には、小学生の部一
二九点、中学生の部四十点、一
般の部三四点の応募があり、応
募総数は二〇三点と多くの方
のご応募をいただきました。

全ての部において、学校で学
んだことや、自らの経験からの
気付き等が素直に綴られていま
した。甲乙付けがたい作品の中
から「人権尊重の思いを読み手
に強く伝えようとしているか」、
「自らの経験に基づいているか」、
「自らの言葉を用いて論理的に
文章を書いているか」等の観点を
もとに、特選、入選作品を選考
いたしました。

【小学生の部】

学校で学んだことや家庭での
経験をもとに、自分の命や周り
の人の命について思いを綴っている
作品が多く見受けられました。
命は先祖から引き継いでいるも
の、その命を傷つけることは人権
侵害になる、未来の命を守るた
めに互いの命を大切にしてい

なければいけないというメッセー
ジが強く心に響きました。人権
教育とは、過去から未来の命を
守る教育ということ、人権教育
の根底にあるものは命だという
ことに気付かされました。

【中学生の部】

自身の体験から、そもそも差
別はどこから起きるのかという
根源に迫りながら、自分の思い
や気付きを力強く発信しよう
としている作品が多く見受けら
れました。

差別の歴史を学ぶ中で、特に
「差別は幸せを奪うこと」という
文章には、差別の不条理さや深
い悲しみが伝わってきました。異
なる背景や価値観をもつ人々が、
共に生きる社会の実現に向けて、
個々の意識改革が重要であるこ
とを改めて感じました。

【一般の部】

大切な家族と共に体験され
たことについて綴られた作品が
多く、深く心を動かされました。
差別が身近で起こっている現

実に向き合いつながら、どうすれ
ば差別を無くせるのか、それは、
人々の無意識に目を向けること
から始まるということに深く頷
きました。「差別は見ようとし
ないと見えない」ということを聞
いたことがあります。誰もが人
権のアンテナを高くして、意識
することによって、差別はおかし
いと言える社会でなければと強
く感じました。

二〇二五年は終戦八十年、
そして同和問題の解決に向け
て、同和对策審議会答申が出
されてから六十年の節目の年で
す。戦争をしないという日本の
平和は維持できていますが、い
じめや不登校等をはじめ、生き
辛さを抱えている学校や社会の
在り方を問い直す必要がある
と考えます。全ての人の人権を
尊重し、差別のない平和な社会
を構築するために、互いの命の
重みを考えた人権教育が深く
根付いていくことを期待してい
ます。また、今後も多くの方が、

自身の思いを文章として発信さ
れ、人権尊重の願いが広く、そ
して確かに育まれていくことを
願っています。

作文部門選考委員